

TEACCHの今日的課題

内山登紀夫(よこはま発達クリニック・大妻女子大学)

TEACCHとは

TEACCH は Treatment and Education of Autistic and Related Communication handicapped Children (and adults) の略です。「自閉症及び関連障害、関連領域にコミュニケーションの障害をもつ子ども(と成人)の治療と教育」という意味です。ノースカロライナ全州規模をカバーする、州の自閉症の援助事業で、本部はチャペルヒルのノースカロライナ大学医学部精神科にあります。

TEACCH の基本的なサービスは病院、学校、幼稚園などでのコンサルテーションが中心となっています。ノースカロライナ州にある9つのセンターではコンサルテーションを中心とした自閉症児・者とその家族の直接援助も行っていてそこでは主に診断と評価、必要に応じてカウンセリングも行っています。診断と認知能力の評価、精神的症状や職業能力の評価に基づいてその人への個別支援プログラムを考えます。実際に支援を行うのは TEACCH のセンターではなく、学校や幼稚園、職場という地域の機関が中心です。TEACCH は学校コンサルテーションや成人ですと職場、グループホームのコンサルテーションや就労援助を行います。TEACCH は自閉症は生涯にわたる発達障害と考えているので、1歳半、2歳からの早い時期から成人期、中年期、老年期にまで至る一貫したサービスを行っています。さらに専門家の養成も行っています。TEACCH は医学部の中にありますが、心理職や教育者、STなどの関連領域関係者たちの養成も行っています。もちろん大学にあるので研究も行っています。TEACCH というのは自閉症の人に直接サービスを提供するだけのプログラムではなく、実に多方面のことを行う組織なのです。



<http://www.yfdc.net>

TEACCHは

- **自閉症児・者とその家族への援助**
 - **診断, 療育, カウンセリング**
- **学校コンサルテーション**
- **グループホームのコンサルテーション**
- **就労援助**
- **専門家の養成**
- **研究**

2005/1/10

Yokohama Psycho Developmental Clinic

3

ノースカロライナ州は訛りが激しいアメリカ南部にあります。地域を9つ分けて9つのセンター、キヤッチメントエリアを持ち、そのエリアの学校、グループホーム、家庭、職場にコンサルテーションをしています。TEACCH というのは包括的な組織であって、もちろん TEACCH などの技法もありますが特定の技法を指すものではありません。TEACCH は大きな組織で莫大なお金をかけてノースカロライナの学校とか施設を運営している人が多いのですが、実際には学校や施設はそれぞれの地域のNPO、社会福祉法人が運営しています。公立の学校も州やそれぞれのカウンティ(市、町などの地域)が運営しています。9つあるセンターにはそれぞれ臨床心理学の資格をもつディレクターが一人、心理、ST、教師などのバックグラウンドをもつセラピストが5、6人います。この程度の人数で一つのセンターが成り立っています。建物もたいしたことはなくて特別の設備は何もありません。診断評価の部屋である 20 畳程度のディレクター室があり、そこで診断、評価の説明をします。臨床スタッフは個室を持ち、コンサルテーションに出掛けるための車があります。巨大な組織というわけではなく、規模でいうと日本の自閉症・発達障害支援センターくらいです。彼らが提供するものは特別の機械、施設ではなく、ノウハウなのです。自閉症支援の方法を考え、手助けをします。



TEACCHの理念

<http://www.yfdc.net>

- 1) 自閉症の特性を理論よりも実際の**子供の観察から理解する**
- 2) 親と専門家の協力
- 3) 子どもに新たなスキルを教えることと、**子どもの弱点を補うように環境を変える**ことで子どもの**適応能力を向上させる**
- 4) **個別の教育プログラム**を作成するために**正確に評価する**
- 5) **構造化された教育を行う**
- 6) **認知理論**と**行動理論**を重視する
- 7) **現在のスキル**を強調するとともに**弱点を認める**
- 8) **生涯にわたるコミュニティに基盤をおいた援助**

2005/1/10

Yokohama Psycho Developmental Clinic

6

自閉症の特性を理論よりも実際の子どもの観察から理解することが TEACCH の基本理念の一つです。TEACCH が出発した1960年代はアメリカでは精神分析が盛んで、フロイドの理論に基づいて親に対して治療を行っていました。自閉症の子どもがクリニックに来ると親の治療が必要だと精神分析的な治療をしていたのです。TEACCH を創設したショプラーは早い時期にそういう考え方は間違っているのではないかと訴えました。ショプラーは、『虚ろな砦』で自閉症は親が原因だから親を隔離するべきだということを言ったベッテルハイムの弟子だったのですが、師匠の言うことはおかしいと子どもを見ながらそう思ったそうです。実際に自閉症の子どもを見て、どう療育をしてどう反応を見てどう変わっていくかどうか、という考えから出発したのが TEACCH の技術的な側面です。親は治療の対象ではなく専門家と協力して子どもの発達を促していく協力者なのです。さらに TEACCH は子どもに新しいスキルを教えるより、子どもの弱点を補うように環境を整えることが大切だと提唱しました。当時としては画期的だったと思います。当時の行動療法家は自閉症の子どもは発達障害だから、子どもにスキルを教えよう、問題行動をなくして何とか子どもを変えようと考えたわけです。けれども TEACCH は子ども自身を変えることより環境を変えることによって結果として問題行動が少なくなる、子どもの発達

が促される方法をとったわけです。これは、子供はそのままでもいいのかという TEACCH 批判の一つの理由でもあります。TEACCH に対して Low Expectation、子どもに対して期待度が低すぎるという批判があります。がんばれば自閉症の子どもはもっと変わるものだというわけです。しかし、ショプラーは子どもを変えより環境を変えることが効果的だと考えたわけです。

TEACCH の教育プログラム

TEACCH は個別化された教育プログラムが大切だと考えます。自閉症は実に多様です。年齢も子どもの示す特徴も多様なわけです。感覚的な過敏さがある子もいれば、あまり過敏でない子もいます。運動が得意な子もいれば苦手な子もいるように、社会性障害やコミュニケーション障害などの自閉症特性の程度も子どもによって違います。言葉がない子もいれば、よくしゃべる子もいます。自閉症的共通の特性はあるけれども子どもによって障害の程度は違うので、評価も個別にプログラムを考えていかなければなりません。基本的な、自閉症共通の特性に対応した「構造化」という大きな枠組みの考え方があって、それをどういうふうに具体的に構造化するかは個々の子どもで変わってくるのです。よく知られているように構造化された教育を行うというのが TEACCH の一つのポイントでもあるわけです。構造化された教育というのは TEACCH は60年代後半から言い出したのですが、同時期にイギリスでも「構造化された教育が効果がある」とラターとバータックたちが発表しました。ほぼ同時平行的にイギリスとアメリカでストラクチャーが大事だと考え始められて現在に至っています。ラターのグループとショプラーのグループとどちらが先に構造化を言い出したか、去年12月 TEACCH に行って直接聞いたところショプラーは「我々だ」と言っていました。

TEACCH は認知理論と行動理論を重視するのですが、TEACCH の考え方の大事な特徴は自閉症を認知障害の側面から理解していくことだと思います。ラターも60年代に自閉症は認知障害だと認識し、日本では80年代になってようやく認知障害だと考えられはじめました。だからどういうふうに指導するかという視点までは到達していなかったのです。80年代後半から都立梅が丘病院で自閉症の担当していた私自身の経験ですが、当時、認知障害説の提唱者ラターの紹介者である中根先生が梅ヶ丘病院の院長でした。梅が丘では自閉症は認知障害だとして治療にあたっていたのですが、認知障害だから行動療法をしようという時代でした。感覚統合の先生も来ていました。当時は行動

療法と感覚統合が中心の時代でした。認知障害だから認知から考えていくという方法は、日本では TEACCH が入る以前はなかったのではないかと思います。TEACCH は認知障害から考えて、自閉症の弱点を補うという方法をかなり具体的な方法で示しました。それが TEACCH の構造化の技法だろうと思います。

精神分析的な自閉症理解は間違っているというのが TEACCH の立場です。TEACCH は行動理論に影響を受けています。行動理論と近いというのは、行動理論は実際に表出された行動をきちんと評価して、その行動が変化していくことを治療の介入の結果として重視します。ここが TEACCH の考え方と似ているところだと思います。ただ行動理論と TEACCH が違うのは、表面に現れた行動よりも見えない脳の中の認知的なところまで考えて脳の中でどういうことが起きているか、自閉症の認知障害からどう考えていくかということを出発点としてプログラムを考えていくのが TEACCH だという点です。

弱点を認めた上で現在のスキルを強調することも TEACCH の基本的な考え方です。現在のスキルというのは、明日できるかもしれないことではなくて、今現在できることです。10年後にしゃべるかもしれないから言葉を教えよう、ではなく、現在ジェスチャーができるならジェスチャーでコミュニケーションがとりましょう。ハンドリング(クレーン現象)が主なコミュニケーション手段だったら、これを大事にしましょう。しゃべれなくても文字が読めるならば文字から教えていこう。そういう発想です。

TEACCH は生涯にわたるコミュニティに基盤をおいた援助が大切だと言います。それは TEACCH は自閉症は生涯にわたる障害と考えているからです。治癒することはないと考えていますから、幼児期に集中的に療育するより、学童期も、成人期も、中年期も同じようにケアしていく必要があると考えているわけです。

構造化の4つの要素

TEACCH でいう構造化には4つの要素があります。構造化はいろんな言葉で、いろんな人が使います。(イギリスの人は別の意味で使うことがあります。)TEACCH で構造化というのは物理的構造化、スケジュール、ワークシステム、視覚的構造化を指します。包括的援助プログラムである TEACCH にも治療技法的な面もあるわけです。そしてその TEACCH が使う技法の一つが構造化なのです。



上の写真はクリニックの個別指導の場面ですが、一人で勉強する自立の部屋には課題は全部籠に入っています。1、2、3のカードがあって、遊びと書いてあるカードがあります。子どもは1番のカードと籠を持ってきて一人で勉強して、フィニッシュボックスに入れます。2番のカードと2番の籠を持ってきて教材をやって終わります。3番をやります。最後に休憩、遊びのエリアに行きます。このような視覚的に課題の順番などを提示する方法がワークシステムです。課題は全部籠にあって、さらに小さなタッパーに入っています。課題が終わったら次に何をやらせたいか次のカードを見ればすぐにわかります。どこに置いたらいいかも籠があればそこに入れればよいとわかります。このようにワークシステムには見通しをつけやすくする効果があります。

それではどうしてワークシステムを考えたのでしょうか。ショプラーの後継者のメジボフによると、メジボフは実際に自分で学校に行ってそこで学校の先生が自閉症の子どもを指導している場면을観察したそうです。一人の先生とアシスタントが5、6人の子どもをみていました。二人の先生で6人をみていて二人の子どもが不安定になったりして一対一で関わる必要がある場面では他の4人の子どもには何もできなくなります。マンツーマンで教師をつけられないので一人の教師が複数の生徒をみなければなりません。そこでメジボフは、子どもたちの自立を促すワークシステムを作ればよいと考えました。そうすれば一人で動ける子は自立の時間は先生が見なくても課題をこなせます。そうすれば

先生は別の子どもに新しいスキルを教えることができます。新しいスキルを教わった後は自立のエリアに来て一人で課題がすることができます。そうしたら今度は自立課題にいた子どもが新しいスキルを教えてもらえる、こういう風にワークシステムがあるととても効率がいいのです。マジポフはあまりに先生がバタバタしていたそうなので、こういうのがいるだろうと思って考えだしたそうです。それではスケジュールはどうやって思いついたのでしょうか。予定表というのは特に自閉症に限らず私たちも普段の生活の中で使うので、そこから発想して最初はスケジュールを思いついたそうです。視覚的なスケジュールを提示すると、子どもが見通しをつけやすくなるので安定して過ごせる時間が増えます。フィニッシュボックスは子どもにその課題の終わりを示すために出来ました。自閉症の子どもは終わった課題をおく場所が決まっていなくてウロウロします。なかなか終結できないのです。こだわって同じ課題を続ける子どもにフィニッシュボックスを視覚的に提示すると、そこに課題を入れて終わりにすることができます。こういうのはどうやって思いついたのでしょうか。視覚的刺激を見るとそれにドライブがかかってやりたくなります。セミナーをやっている時、現場の先生たちがこんなことをするとうまくいくのだと自然発生的に出して、実際に使ったらうまくいきました。そこからフィニッシュボックスの概念をつくったそうです。

日本の TEACCH の課題

①自閉症スペクトラム障害概念の普及

日本の TEACCH の課題としては、発達障害としての自閉症スペクトラム障害概念の普及があります。実際に TEACCH 的な話をしていると、行き詰まることの一つは、自閉症は生涯にわたる発達障害だという TEACCH の基本理念の理解の啓発が必要であるということです。自閉症は治るものだろう、治るとははっきり言わなくてもビシバシやれば何とかなるだろうということが教育者の中に抜けていません。療育者、教育者の万能感があると難しいのです。「ちゃんとしつけをしなないとだめですよ」「偏食は頑張れば治りますよ」「しっかり叱らないと社会に出た時に困りますよ」という話がよく出てきます。しっかり厳しく指導すれば、将来、奇声を上げなくなるのでしょうか。言葉のない人に、カードを使わないとそのうちしゃべるのかというと、そんなことはわかりません。もともと自閉症の半分は意味のある言語を持たないというデータがあった時代もありました。当時は言葉だけで教えていたわけですから、言葉だけで教えたなら半分はしゃべらないのは当然な

わけです。

ロバースは「自閉症の半分は早期発見して40時間療育すれば半分治る」と言っています。この発言は強い影響力がありました。しかしTEACCHは自閉症は一生治らないと言う。40時間やって治るなら親はその方がいいわけです。構造化したとしてもずっと構造化できるわけではない、だから構造化はいらない、構造化したら構造化の中でしか生きていけない人が大人になってしまうという批判があります。構造化しなければ、今までの伝統的な教育をしていけば、成人期の自閉症の人が社会に根ざして何の支援もなく適応しているのでしょうか。そんなことはないわけです。万能感にどう向き合うかは一つのテーマだと思います。

②個別化理念の正しい理解

TEACCHの基本理念には「個別化」があります。日本だけでなく、個別化の理念を正しく理解するのはなかなか難しいものです。特別のことをしない特別支援教育という話がありましたが、特別支援教育の概念は確かにあるのだけれど、自閉症の特性を生かしてこういふふうにしてくださいという「そんな一人だけに特別のことはできませんよ」と言われます。日本中どこでもそうです。個別化という理念は構造化を個人の能力、興味を無視した集団指導のために誤用濫用化されています。構造化はかなり有効だとうことは皆さん気がついてきています。視覚的に提示すれば入るとわかっています。視覚支援だといって視覚的な指示をします。さて、そこでどんな指示をするのでしょうか。座る、黙る、落ちつくとか、騒がない。教師や親から見て問題がある行動ばかり書いています。「カードを使って、ちゃんと言うことを聞いていたのに、最近、カードを見ると破るんです」といいます。あたりまえだと思わないのですか。いつもだめだと言われれば、それに対して嫌がるのは当然でしょう。でもそういう誤用、濫用の実態があります。構造化は自閉症に対してパワフルなのです。ある意味拘束的な効果もあります。ほんとは嫌なだけで、視覚的に提示されると、つい心の中も従うという自閉症の子もいます。アスペルガーの子の中には、スケジュールを提示されると嫌だけど、あれをみると従いたくなっちゃうんだよね、それが辛かったということがあります。

個人の能力や興味を無視して、子どもの自己実現のためではなく、大人の都合に合わせて使う場合があります。「何でも絵カード」や「何でもついたて」という個別化されていない「TEACCH もどき」があります。絵がわからない重度の自閉症であれば絵は使えないわけです。絵より文字に反応する子、絵はだめだけれど写真なら分かる子もいます。

ごく稀に視覚より声の方がいいという子どももいるのです。個々の特性を生かしながら TEACCH 的な考え方に基づいた指導はしづらいいと思います。TEACCH をやっているという学校に行くと全員絵カードだったり、全員同じスケジュールだったりということがあるわけですが。先生が使っている視覚提示は「静かにする」だけだったりするのです。問題は「構造化」の背景にある認知障害概念がなかなかわかりにくいことです。認知障害という言葉はあるけれども、認知障害の意味がわかっていない人が多いのです。スケジュールとかワークシステムとかジャグは視覚的な手順書です。いわゆる設計図みたいなものです。問題はなぜ使うか、なのです。自閉症の子どもは聴覚より視覚の方が理解しやすいのです。同時に彼らはプランニングが苦手です。実行機能障害という前頭葉障害があります。実行機能障害があるからプランができない、だからスケジュールやワークシステムを使うのだ、という理解まで到達するのはなかなか難しいのです。とりあえずワークシステムを使おうという程度です。歴史的にみると TEACCH の人たちがスケジュールやワークシステムをつくったのは、実は実行機能障害の概念が出る以前なのです。自閉症の実行機能障害説を広めたオゾノフという人は TEACCH に国内留学して帰ってから実行機能障害説を唱えだしました。経験的にこうすればいいんだということがあって、そういう工夫を TEACCH の人たちがして、実際に有効であることがわかって、その後に理論が出てきました。基本原則の通り、理論から出発するのではなく、現場から出発して結果的に理論が投影されたのですね。

物理的構造化、視覚的明瞭化はどうでしょう。自閉症の特性の一つには選択的注意、自分で注意を分割できない、本来注意すべきことに注意できないということがあります。何かやるべき時間に違うことをやってしまう。隣の女子の髪の毛を触るのは、認知理論で考えれば注意のフォーカスが間違っています。周りに余計な刺激物がたくさんありすぎて、その子の注意の焦点づけが難しくなっている、だから余計な刺激物を少なくしてあげる。今何に集中すべきかをわかりやすく情報整理してあげる。そういうことが TEACCH の発想による介入ということになると思います。

つきつめてみると、情報処理障害としての自閉症概念、自閉症を認知障害だと言われているんですが、それが情報処理の障害があるといろんな情報をうまくまとめられなかったり、今ある情報に基づいてプランニングができないことが自閉症の本質だということがなかなか理解されずに、とりあえずついたとかスケジュールを使ってみよう、となっているのが現状なのです。

③構造化の正しい理解

構造化に対する誤解も少なくありません。自閉症の背景にある認知障害、認知障害を意識して認知障害があるからこういう行動をしているという、why がわかっていない人が療育場面をパッと見ると構造化は刺激遮断であるとか、子どもに対して刺激を一切遮断するのだという考えで止まってしまう。日課や周囲の状況を一切変えないのが TEACCH であると思ってしまうのです。これは全くの大間違いです。自閉症の子どもの認知障害は変動します。情報処理能力が一定しないのが自閉症の特徴ですから、その子、その日の状況に合わせて柔軟に構造化を変えないといけないのだけれど、なぜか一切変えないのが TEACCH だと思っているのです。構造化だけが TEACCH であるという人もいますが、構造化は TEACCH の大事な手法ではありますが、基本的に TEACCH は自閉症は治らないと言っています。TEACCH は包括的な生涯に渡る地域ベースのプログラムを構築することに力を入れているのです。

④TEACCH を理解した療育者の養成

日本で教えていて苦労するのは、学校の先生にどう柔軟性を教えるかということです。自閉症の子に柔軟性を確保するのではなく、先生に柔軟性を確保する方が大変です。いつも一定の方法で教育しなければいけないと思い、TEACCH 自体を構造化してこの子についてはこういうスケジュールにしようとして一定化してしまうのです。本来ならば、その日その場で子どもがどういう状態があるのかによって対応が違ってくるわけです。多くの先生はそういうことがなかなかできません。柔軟に対処できないのです。自閉症の情報処理能力が一定しないからその時、その場の子どもの状態に合わせて柔軟に創意工夫していく、ということが先生方に求められているのですが、それがなかなかできないのが辛いところです。

それはどうしてかなという、TEACCH を理解するのは専門家でも簡単ではないのですね。今回もセンターでセラピストやディレクターと話をする、TEACCH の技法は実際にパッとみるとやさしそうに見えても、使ってみると結構難しいことがあるそうです。そこで別のセラピストやディレクターに聞いて「こうすればいいんじゃないか」「ああすればいいんじゃないか」「あ、そうか」と。専門家にとってもパッとわかるわけではないのです。とりもなおさず、自閉症を理解することは難しいというわけです。自閉症は複雑です、

簡単には理解できるわけではありません。立ち向かうのは容易ではありません。療育者側に柔軟な発想、知識、技量、テクニックが求められます。

同じように、TEACCH を理解するのも容易なことではありません。しかし本当はよく分かっていない人が理解した気になって TEACCH の情報を流すこともよくあります。日本のネットや掲示板で流れている TEACCH 関連の情報は結構、アレっと思うことが多いです。TEACCH の5日間のセミナーに参加した後学校に帰ってやっている先生たちも、これは間違っているかなということも多々あります。自閉症の子どもがある方法ではうまくいかなくなってパニックになったら、その方法を変えればいいのだけど、方法を変えるところがうまくいかないのですね。

TEACCH ファンの人たちの中には、意識的、無意識的に自分の過去の方法から脱却できない人がいます。そういう人が情報を流すことで TEACCH を理解するのにますます混乱する先生たちがいるという状況があります。

日本の TEACCH の課題は、TEACCH を理解する、自閉症を理解する領域の重要性にあると思います。僕の師匠である TEACCH のジャック・オルソンに習ったのですが、その重要性には3段階のレベルがあります。

TEACCH を理解した療育者の養成

- レベル1. TEACCH の基本理念を歴史的・心理学的背景から理解したコンサルタント
- レベル2. ある程度の SV を受けながら柔軟にプログラムを作成・実施できる療育者
- レベル3. レベル2の指導を受けながら支援するアシスタント

レベル1というのは TEACCH の基本理念を歴史的・心理学的背景から理解したコンサルタント。こういう人が何人か必要です。レベル2はある程度のSVを受けながら柔軟にプログラムを作成・実施できる療育者。学校に一人くらい必要だと思います。そしてレベル3というのは、レベル2の指導を受け支援するアシスタントです。各クラスの担任、作業所の指導員がこの人たちだと思います。しかしそういう人たちの養成するシステムが日本では全くできていません。人的環境も乏しいものがあります。TEACCH を勉強する人たちは自分の仕事を持ちながらボランティアベースでセミナーに参加する人たちですから、学校で公的な就業時間内に講習があるとか、学校で日常的にコンサルテーションを受けられる状況にはないわけです。

これからの課題としては TEACCH メソッドの有効性の科学的検証があります。アメリカや北欧では行われているのですが、日本はここが弱いところです。TEACCH メソッドの普及への公的資金の導入も課題の一つです。モデルクラスの設定としては東京の養護学校でモデルクラスがいくつかできていますが、その運営がうまくいっているかどうかはこれからの検討事項です。本部の TEACCH との連携をとりつつ日常的に協力しあいながらやっていく環境にはまだありません。本部だけではなく他の国の TEACCH に関心のある人たちと協力していく状況にはまだないということです。

TEACCH のメソッドは日本でも有効だと思いますが、実際に使うとなるとそれなりの療育者に技法が必要だし、センターが必要で、スーパーバイザーも必要になってきます。そういうシステムがないまま表面的な理解が広まったことは多少反省点としてあるかと思っています。

質疑応答

質問 宗教とか哲学とか、形而上学も含めて単語も含めて文章をCGや演劇で視覚的構造化したデータベースを構築して、いつでもアクセスするシステムをつくることはどう思われますか。形而上のものを形而下にすることです。

内山 TEACCH の技法は形而上のものを形而下にすることかもしれない。認知、見えないものを実際に見える形にして支援を考えていく。けれどもそれをデータベース化するのは難しいと思われます。try and error があるのですね。実際に子どもにやってみたらうまくいった、いかなかった、じゃ、ここを変えようというのが TEACCH 的発想です。現場で子どもとインタラクションしながら交流して構造化を変えていくのが、相手がこうだったら、こうしたらいいという。こっち側の柔軟性が必要になってくると思います。

質問 自閉症の基本的な障害については情報処理の観点から出されますが、情動とか側面について TEACCH はどう考えて、その支援についてはどう取り組んでいますか。

内山 自閉症の基本障害は認知障害だというのが TEACCH の立場だと思います。情動、情緒とか、フィロソフィとか深いものに対してどうするかという質問だと思いますが、自閉症の子どもは認知の過程がうまくいかないので混乱します。認知障害を補うように

構造化すれば混乱はおさまっていきます。その上で認知障害を意識した交流ができれば、一般的にかかわり方、普通の人間的な交流ができます。視覚障害の人には視覚を補うようなデバイスがあれば、近眼の人は眼鏡があれば、難聴の人には補聴器があれば、とりえず基本障害はおさえられます。その上で一般的な交流をしていけばいいと考えているのだと思います。

質問 情報の混乱を直せば、自閉症の社会的障害の一つである情動の問題はなくなると考えておられるのですか。

内山 社会性の問題は情報処理の障害から来ていると考えるのです。その見方の違いだと思います。社会的認知がうまくいかない。相手の感情が理解できない時に、相手の表情を読む能力が乏しい。だから感情が理解できない。したがって感情的交流が乏しくなる。相手の表情を読めるような方法を考えると、こちらがこちらの感情を伝えやすいようにもっと明確に子どもに自分の感情を伝えていくという対処をしていくわけですね。